

中国の山と宗教見聞記（その七）

— 徐霞客の足跡を訪ねる：広西南部・雁蕩山・五台山 —

薄井 俊二

はじめに

二〇〇五年より、科学研究費補助金や埼玉大学研究プロジェクトの助成金を得て、中国の山岳を見て歩く機会を得ている。その折の概要と見聞について報告しているが、本稿はその第七である（¹）。近年は、明代の地理学者徐霞客の探訪ルートを中心に訪問しているため、標記の副題を付した。今回は広西壮族自治区南部の都嶠山・勾漏洞・水月岩・左江石林、浙江省の雁蕩山、山西省の五台山について報告する（図1）。

I. 広西南部初訪（広西壮族自治区再訪）

一. 広西南部について

(一) 位置

都嶠山は玉林地級市容県、勾漏洞は同北流県、水月岩は同玉

州区に、左江石林は崇左地級市江州区に位置する（図2）。玉林地級市は東に広東省に接しており、海に注ぐ南流河川と、西江に注ぐ北流河川との分水嶺をなす。崇左地級市は西にベトナムに接し、古くからベトナムとの交流拠点である。いまでも「友誼関」があり、交流交通が盛んである（²）。ベトナムから流れてくる崇江が東流する。

両地区とも、北緯二二度五分から二三度の間にあり、台湾南部とほぼ同じ。省都の南寧もこの範囲。気候もほぼ亜熱帯。

(二) 概要

都嶠山は容県城の南一〇kmにある山塊。南北に岩山が並び、その間の谷底を川が南流する。いわゆる「丹霞地貌」で、牆壁のように立ち並ぶ岩山には、横様に洞穴が裂ける。道教では、三十六洞天の第二十で、唐末杜光庭「洞天福地嶽瀆名山記」では「都嶠山、太上宝玄上天、八十里、在容州」とある。徐霞客

の訪問は、崇禎一〇年（一六三七）八月。四日に山に入り、五
〜六日で探索し、六日に山を離れている。粵西遊日記二。

勾漏洞は北流県城の東北五km、勾漏山脈の南麓にある。岩山
の地下に形成されている鍾乳洞である。元々は複数の小洞で
あったが、現在は全てが貫通している。觀光洞はおよそ一km。
古く東晋の葛洪が丹砂をもとめ、煉成して昇仙したという伝説
がある。道教では、三十六洞天の第二十二で、「洞天福地嶽瀆
名山記」では、「勾漏洞、玉闕宝圭洞天、三十里、在容州、有
石室丹井」とある。徐霞客の訪問は、都嶠山訪問に先立つ、八
月一日。灯りを持って入洞し、詳細な観察記録を残している。
翌二日、洞内の碑文を書写しようとするが、役人が視察に来て
しまい、十分に書き写せなかったという。粵西遊日記二。

水月洞は玉林県城の東一〇kmの、石灰岩の尖った岩山が展開
するカルスト地形の中にある。岩山を貫くかなりな大きさの貫
通洞で、閉鎖的ではない。いまでもかなりな水量の河が流れる。
徐霞客の訪問は、勾漏洞に先立つ七月二十八日。粵西遊日記二。
同書で「前後有門、一望通明」と描写している。

崇左市は、もと北の左州（左県）と南の崇善県であったが、
一九五一年に合併。市政府があるのは、旧崇善県。左江石林は、
崇左石景園ともよばれ、県城の南五kmあまりにある。近年開発
されたもので、様々な石峯が立ち並び、波打つ石板や石洞が奇
妙な景勝をなす。事前の文献調査によれば、崇左近辺には、徐
霞客が訪れた洞穴や、近年発見された洞穴の存在が記されてい
た。ところが現地で分かったところでは、すべての洞穴が閉鎖
されており、探索不可であった。徐霞客の訪問は、同年四日か

ら十八日。左江北岸の壺関を拠点に、白雲岩や碧雲洞を探索し
てる。粵西遊日記三。

二．見聞記

(一) 目的

徐霞客遊記において、広西の日記は、雲南に次ぐ長さがある。
特にカルスト地形については最も詳細であり、遊記の特色のひ
とつとなつてゐる。広西全部をまわることはできないが、昨年
度訪れた「桂林」を広西北部の要とするならば、玉林と崇左あ
たりは広西南部の要といえる。そこでこの両地域を選択した。

(二) 旅程（単独行）…二〇一五年八月一八日〜二二日

一日目 成田↓〔飛〕↓北京↓〔飛〕↓南寧（南寧泊）

二日目 南寧↓〔車〕↓玉林…都嶠山・勾漏洞探訪（玉林泊）

三日目 玉林…水月岩↓〔車〕↓崇左（崇左泊）

四日目 崇左…崇左石林・文羊岩↓〔車〕↓南寧…揚美古鎮（南

寧泊）

五日目 南寧↓〔飛〕↓北京↓〔飛〕↓成田

(三) アクセスルート

広西南部は、かつては水路が交通路であった。ベトナムから
流れ込む左江は東流して崇左市を流れ、南寧市あたりで邕江と
なり、さらに郁江と名を変える。北の桂林・柳州から南下する
黔江を受け入れてさらに東流し、潯江となり、広東に入つて西
江となり海に入る。こうした河川が人と物の流通経路であった。

河川の沿岸に都市が建設され、そこから内陸部は少数民族が優位な土地であった。ただし、同じ玉林でも、都嶠山や勾漏洞からの北流河は北流して潯江に至るが、水月岩あたりからの南流江は、まさに南流して海に至る。

今回は、航空機で、北京経由で南寧に入った。「南寧―玉林」間、「南寧―崇左」間は、陸路を車で移動したが、右記の水路と、ほぼ平行するものであった。この点では、広西南部においては、昔のルートをはばたどることが出来たと言える。

(四) 見聞報告

一日目は移動日。北京を経由して南寧へ。空港で、日本語ガイドが遅れると聞く。運転手の案内でホテルへ。その後ガイドと合流し、翌日以降の打ち合わせをする。南寧飯店に泊。

二日目は南寧から東へ車で移動。途中高速道路にも乗り、約三時間で容県。昼食後都嶠山へ(写真1)。

森林公園などもあわせて4 A景点をなしているはずだが、中々見つからない。桂林から来た日本語ガイドも、南寧の運転手も、はじめてだと言う。中国きつての観光地「桂林」や、近年話題となっているベトナム国境に近い「徳天大瀑布」が集客力が抜群で、省外からはおろか省内の観光客も、都嶠山などへは来ないのであろう。

ようやく辿り着くが、人工湖の洞穴めぐりやロープウェイなど軒並み改修中で使用できず。しかし、巨大な岩山が立ち並び、その間のV字谷を溪流が流れる様は、丹霞地貌特有の雄大な景観をなす(写真2)。慶寿岩に穿たれた洞穴には、はめ込むよ

うに慶寿岩禅寺や五百羅漢堂などが建てられており(写真3)、自然と人事が融合した景観を形成する。向かいの山肌には、元中国佛教協会会長趙穆初(一九〇七―二〇〇〇)が揮毫した、高さ百メートルを超える「佛」の字が彫られている。

次いで勾漏洞へ。カルスト地形の尖った岩山が点在する中にある(写真4)。公園として整備され、葛洪の像がある。

入洞の時間が決まっており、自由に出入りはできない。中国の鍾乳洞は、おおむね公園化され、一定の時間ごとにガイドが誘導して入洞する。安全のためと、落書きや破壊を防止するためであろう。

洞内は、鍾乳石や石筍等の二次生成物が多くできている。極彩色の照明で照らされているのは(写真5)、中国独特の洞穴景観である。訪問者の文人が残した碑文も数多く現存している。

当初は、三日目「崇左への移動、左江石林などの訪問」、四日目「徳天大瀑布訪問、南寧へ移動」の予定だったが、「徳天大瀑布」が大変混雑するらしいことを考え、三日目「玉林の水月岩、崇左への移動」、四日目「左江石林と崇左周辺の洞穴訪問、南寧への移動、揚美古鎮訪問」へと変更した。玉林市の嘉和國際酒店に泊。

三日目は、先ず水月岩。カーナビにも登録が無く、中々見つからない。地元の人に聞きながらさんざん探し回り、漸く辿り着く。あたりは雄大なカルスト地形の岩山が展開し、その間の平野を河が流れ、トウモロコシ畑が広がる(写真6)。平穏な農村風景の中に、石灰岩切り出し場やセメント加工工場がまじる。小川を溯った行き止まりが農家で、その奥に水月岩があった。

岩と名するが、岩山に穿たれた洞穴である。

洞口の右手に崩落による岩穴があり、その中に祠が造られている(天井は岩で、前壁のみ煉瓦造り。写真7)。天井の岩には「水月岩」の揮毫が彫られており、「明嘉靖庚申(一五六〇)郡人陳懋題」とある。他にも、うっすらと漢詩らしきものが見られ、ローカルレベルであるが、信仰の対象として大切にされていた名所であったことを伺わせる。

祠の中には神仙らしき塑造の座像が並んでいる。しかしすべて首が打ち落とされている。像がいつの作で、いつ首が落とされたかは分からないが、宗教的な像の断首は、多くは文化大革命の時代である。そうであれば、その後首無しのままだったことになる。また龍のレリーフがあしらわれた柱が立つが、龍の口に豆電球の痕跡があり、近年整備されたものであることが分かる。しかし今はその仕掛けも壊されており、放置されている。壁は落書きだらけで、狼藉の限りであり、天井の碑刻が伝える名所としての雰囲気とは大いに隔たりがある(3)。

洞口に、篆書体で「西天洞口」の揮毫がある(写真8)。「五柴梁師指」の添え書きがあるが、「師」の字はいわゆる「簡体字」で、龍の柱と同じ頃の、近年の碑文なのかもしれない。

洞は、中を流れる水面から天井まで、五びあまりの高さがある(写真9)。長さは二〜三〇びあまりだろうか。水際は泥でズブズブであるが、洞の壁際にはコンクリート建築の跡が残っており、何らかの整備がなされたのであろう。スカラップが見られる天井には、いまでも二次生成物の形成が進行中で、鍾乳洞として現役である。

整備の痕跡があることから、一度整備して観光地化をはかったものの、やがて放棄されたものと思われる。前夜、玉林市内のレストランで、地元の若者に水月岩について尋ねてもらったところ「行ったことにはある。だが、観光地でもないのに何故行きたいのか」と問い返してきた。崇左の文羊洞も同様であるが、放棄され荒れ果ててしまった名所旧跡は、中国で枚挙にいとまがないほどである。

なお『沿着徐霞客的足跡』(広西師範大学出版社、二〇〇九)という、広西壮族自治区における徐霞客の足跡を追った著述に、水月岩の現況を記した一文を載せる。

昼前に玉林を発ち、昼食をはさんで、夕方に崇左に至る。聖展酒店に泊。ここは崇左の市外に立つ「鬼城」の一角。「鬼城」とは、投資目的で作られた別荘群で、実際の入居者がほとんどおらず「ゴーストタウン化」している状態を言う。僻地といえる崇左市にも「鬼城」が及んでいる。しかし周辺の店は「内装屋」ばかりで、レストランもなく、夕食に手間取る。

四日目は、先ず市内の左江石林へ(写真10)。九時過ぎに着くと、他のお客は誰もいない。奇岩にガジュマルの木がからまり、不思議な景観が広がる。ここを徐霞客が見たわけではないが、同じような石林はたくさんがめただろう。

とても暑く、熱中症気味となる。やや冷えた飲み物を飲んだら、今度はおなかが緩くなる。

崇左の洞穴については、事前に見ていた『崇左県志』(広西人民出版社、一九九五)には、数多くの記載があった。徐霞客が記す白雲洞や碧雲洞、また一九八三年に新たに発見された文

羊洞などである。そこでこれらの洞穴をリクエストしたが、運転手は、どこにあるか分からないという。やむを得ず近年開発されたことが分かっている文羊洞にしぼって探すことにする。

しかし、文羊洞も見つからない。カーナビには無く、道行く地元の人に聞きまくるが、要領を得ない。ようやくそれらしき岩山に辿り着くが、洞口らしきものも見えない。すると、軽トラックで夫婦者が登場。聞けば「発見後、地元政府が観光地として整備していたが、やがてさびれ、閉鎖された。いま自分たちが土地の利用権を買ったので、これから整備をする予定だ」とのことであった。茂る森の中に石垣らしきものが確認できた。入洞はおろか洞口の確認すらできなかったが、岩山全体の雰囲気はつかめた。

崇左を発ち、揚美古鎮へ。ここは、『地球の歩き方 広州アモイ 桂林 二〇一〇―二〇一〇』に、「南寧 郊外の見どころ」として掲載されている。左江沿岸の要衝の地であり、港町として栄えた。今は、いわゆる「古鎮ブーム」に乗り、昔の佇まいを復活させた、観光地を目指している。しかし、宗廟は荒れ果てており、孔子廟では廟守が「昔はもつとちゃんとしていたのだが、今は誰もお参りしない」と嘆いていた（写真11）。南寧に帰り、南寧飯店に泊。

五日目は、移動日。北京を経由して成田へ帰り着く。

補足：広西道路事情

広西南部は舗装道路が極めて劣悪だった（写真12）。アスファルトでなく、コンクリートで舗装をしているのだが、石灰石などを満載した大型のダンプが疾走するため、路面があちこちで割れている。さすがに高速道路はおおむね修復されるが、一

般道はあとまわしにされ、ひび割れが放置されている。そこをダンプが走るため、さらに破壊が進む。この省は、GDP一人当たりで、三一の省中二六位と下位にある。インフラ整備にお金がまわらないのであろう。

（五）まとめ

今回は、都嶠山・勾漏洞・水月岩といった、広西南部の代表的な名勝をほぼ実見して探索できたことが収穫であった。いずれも徐霞客遊記に記載がある場所で、訳注の作成に資するところも大である。また、車ではあったが、「玉林―南寧―崇左」間を移動できたことも、土地勘を得るといって成果があった。

他に、名勝や遺跡の破壊や忘却といった事態も考えた。崇左周辺の洞穴などは、一九九〇年代作成の地方志に掲載されているのに、今は放棄され、忘れ去られている。これは流行に乗り遅れ、観光地化されないと、短期間で棄てられてしまうという、現代中国の状況を反映しているのだろう。

一方、一九九〇年代の資料そのものが、不正確だったことも考えられる。これは市販の地図にも言えることだが、地理的な情報について、資料作成の時点で「確認調査」せず、それまでの情報をそのまま「孫引き」することがよくある。崇左の洞穴情報も、既に隠滅してしまったにも関わらず、それを確認せず、古い資料の記事をそのまま転載している可能性がある。

こうした「子引き・孫引き」は、実は明清時代の伝統的な「地方志」編纂においてもしばしば見られる。後発の地方志は、前発の地方志の記事を踏襲し、その後を生じた新たな情報を書き

加えてゆく。新たな情報は、間違いなくその時点で存在しているものだが、踏襲した部分について、地理情報の再確認をせず、そのまま載せることが往々にしてある。この点、中国「文化」のひとつの伝統といえるかもしれない。

II. 雁蕩山初訪

一. 雁蕩山について

(一) 位置

雁蕩山の名を持つ山塊は、浙江省温州地級市に三つある。北・中雁蕩山は乐清市に、南雁蕩山は平陽県にある。通常「雁蕩山」というのは、北雁蕩山である。このとき訪ねたのもその山(図1)。

乐清市は北緯二八度あたりで、奄美大島と沖縄の中間くらい。沿海の温暖な気候である。雁蕩山も海沿いとまでは言えないが、「海に近い」といえる。

(二) 概要

雁蕩山は、アジア大陸の海浜に広がる火山帯の上にある。一億年以上前の火山活動によって生じた火成岩の巨大な岩山が、長い年月をかけて浸食・崩落などを繰り返した。その結果、いく筋もの深いV字谷や、まるで大地から生えたかのような細い岩山が立ち並び景観が形成された。今でも瀑布が流れ、浸食が現在進行形である。

岩山と洞穴が形勝を形成する。しかし、洞穴と言ってもカル

スト地形の鍾乳洞のような、深く長いものではない。火成岩の崩落によるドーム状のものや、浸食によって形成された岩の裂け目などが主である。

宋代に沈括(一〇三一〜一〇九五)がここを訪れ、「天下奇秀」と賞賛した。彼は、瀑布、谷、岩を観察した上で、「谷に流れ込んだ川の水が、砂や土を運び去り、岩だけが残ったのである」という見解を示している。これは「浸食作用」という地形形成概念を示した、ごく初期の記述である(4)。

現在は、国家五A級景区(図3)。東西方向に山脈が伸び、山脈の南側に谷が幾筋か刻まれる。景区で言えば、東から順に、靈峯景区・三折瀑景区・靈岩景区・大龍湫景区・雁湖景区があり、これらは古くから知られたところ。近年は、山脈北側の顕彰門景区、さらに北部の仙橋景区、また東へ飛び地の羊角洞景区なども、雁蕩山の景区に含む。

徐霞客は三度、雁蕩山を訪れており、そのうち初回と三回目(遊記がある。遊記では「雁宕山」と表記されている。遊雁宕山日記は、万曆四一年(一六一三)四月九日から一五日まで。遊雁宕山日記後は、崇禎五年(一六三二)四月二十八日から五月八日まで。遊天台山日記後に「三月に天台山訪問後、雁宕山に行った」と記す(二回目、遊記なし)。その後一度天台山に戻り、天台山の記事を記し、再び雁蕩山に向かったという。

二. 見聞記

(一) 目的

徐霞客が詳細に描写している、雁蕩山を実見することを目的

とした。また、このころ、山を流れる「気」に着目しており、雁蕩山の岩山を「気」の観点から眺めることも目的とした⁵⁾。

(二) 旅程(単独行) …二〇一五年二月二六日～三〇日

一日目 羽田↓〔飛〕↓上海↓〔鉄〕↓雁蕩山(雁蕩山泊)

二日目 雁蕩山(雁蕩山泊)

三日目 雁蕩山(雁蕩山泊)

四日目 雁蕩山↓〔鉄〕↓上海(上海泊)

五日目 上海↓〔飛〕↓羽田

(三) アクセス

杭州からは、海沿いに、東へ紹興・寧波へ行き、南に転じて寧海・台州を経て、雁蕩山に至るのがメインルートであろう。

さらに進めば、楽清・温州を経て福建省に入り福州へ、さらに広東省に入り広州に至る。

今回は、上海から杭州へ、さらに右記のルートで往復した。

(四) 見聞報告

一日目は移動日。羽田から上海虹橋空港へ。

当初、上海から温州まで航空機国内便で移動し、そこから鉄道で雁蕩山へ戻る予定だったが、天候不良で遅延、欠航のおそれが生じた。そこで、高速鉄道に切り替えた。

上海から雁蕩山駅までは、およそ三時間半。「上海↓嘉興↓海寧↓杭州↓紹興↓余姚↓寧波↓奉化↓台州」と古くからのアクセスルートを陸路でたどり、雁蕩山駅へ。この駅は雁蕩山観

光を目的として作られたもの。周囲に町や人家もなく、海沿いのだけだっ広い平地に、忽然と大きな駅ビルが聳える。

夕食は、雁蕩山のガイドの知人の海鮮食堂へ。以後、昼夜の食事はすべてこの食堂で。雁蕩賓館に泊(以後三泊同じ)。

二日目から四日目の午前まで、雁蕩山をまわる。東へ流れる碧玉溪は、集落をなす響嶺頭村で北から流れてきた鳴玉溪と合流し、白溪と名を変えて海に注ぐ。その碧玉溪へ向けて、雁蕩山系から幾筋かの谷川が注いでいる。その谷毎に景勝が存在する形となる。

二日目は、午前は大龍湫景区(写真13)。碧玉溪の源は馬鞍嶺という高地で、それを越えると、嶺沿いに南流する谷川がある。錦溪・筋竹澗という、海に直接注ぐ河である。その水源が、大龍湫という瀑布。

響嶺頭村の宿から車で十分程度で、景区の入口に至る。ここから、丹霞地貌が様々な姿を見せる。岩山が並び立つ千仏岩や、見る方向によって「和ばさみ」「きつつき」「熊」「舟のmast」と姿を変える剪刀峯など、奇岩が連続する。溶岩流の痕跡である火山岩流紋地形も観察できる。そして谷の一番奥、溪流の水源が大龍湫である。

これは高さ二〇〇ほどの瀑布で、滝壺に絶え間なく大量の水が注ぐ。長い距離を下るため、水は散り散りになりなつて注ぐが、風にゆられて、あたかも空から龍が舞い降りているかのような景観をなす。瀑布の裏側から眺めることもできるが、大量の水のカーテンである(写真14)。徐霞客含め多くの文人が訪れ、詩文に記している。明清代の碑文も多く刻されている。

午後は霊峯景区。響嶺頭村から鳴玉溪を北に少し溯ったところにある。霊峯自身は鳴玉溪右岸にあるが、左岸にもいくつもの景観がある。霊峯寺の後に聳える霊峯は、高さ二七〇メートルの尖った岩山で、前面に、浸食によって生じた長い割れ目が開いている。これを観音洞という(写真15)。洞とはいいが、鍾乳洞のような円筒形ではなく、細い割れ目が麓から山腹まで続く、オープンな穴である。洞内の壁沿いに、十層の楼閣が連続して建てられており、四百段近い階段を上ると、最上層が観音閣となる(写真16)。ここはドーム状をなしており、楼閣は前壁のみで、天井は自然の壁。洞内は、大小さまざまの、おびただしい数の観音像と羅漢像で埋めつくされている。徐霞客も五百羅漢を見たといっており、明代からこうした景観をなしていた。天井から大量の水滴が流れ落ち、轟然たる音を立てる。高い岩山の中腹だが、放生池を形成している。

このエリアでは、他にも、横様に刻まれた北斗洞、將軍洞があり、はめ込まれるように寺院が建っている。鳴玉溪左岸には、徐霞客も記録する小さな「風洞」や、丹霞地貌には珍しく、地底にもぐる「霊峯古洞」などもある。

夜は霊峯の夜景見学。薄暮の中で、岩山はシルエツトのみとなる。そこで「翼を広げる鷹」や「寄り添う恋人」などの「見立て」が行われる。

三日目は、朝、散歩がてらに朝陽洞見学(写真17)。村から遠望できるが、少し歩いて岩の麓まで行く。岩肌の一部が崩落し、ぼつかりと穴が開く。口径は三〜四メートルあり、深さは二メートルもない。しかし、朝日を迎え入れるような方角に口を開ける。風

水説では、洞穴は「気の通り道」であると考え、浅いものであっても、そこから「気」が出入りすると考える。この朝陽洞も「気」を吐く、あるいは受け入れる「洞口」なのである。

午前は、霊岩景区。響嶺頭村から奥へ二つ目の谷。門のように聳える二つの岩山は、寺院の建築物にちなみ、鐘岩・鼓岩と称される。門をくぐると、穏やかな雰囲気の窪地、双珠谷がある。周囲の岩山は、天に向かって伸び上がっているような景観をなす(写真18)。一九九六年建立の徐霞客の石像が立つ。

その奥に、そそり立つ岩々に囲まれて、北宋創建の霊岩寺が静かに立つ(写真19)。寺の後方に聳える巨大な岩山が、展旗峯で、屏霞障ともいう。向かい合う天柱峯とあわせて、南大門とも称する。その南大門の上部に綱を渡し、綱渡りのシヨウが開催されている。

寺の後方を登ると、天窗洞がある。これも霊峯の観音洞と同じく、岩山の脊に出来た細長い裂け目である。設けられた階段を一〇数メートル登ると、洞の頂上部分は岩山を突き抜けた吹き抜けになっている。そこから向こうはほぼ垂直に落ちる縦穴となっている。他に象鼻洞があるというが、同様の景観であるというので省略し、麓から岩山を観察するのに時間を費やす。

さらに谷を窮めていくと、溪流の水源である小龍湫がある(写真20)。こちらは高さ約七〇メートル。

午後は、三折瀑景区の浄名谷。響嶺頭村から一つ目の谷。景区名の三折瀑布は、谷の入口から右に進む、近年になって発見された新しい景観。古くから知られていたのは、入口から左へ、溪流沿いに溯る浄名谷である。丹霞地貌のV字谷を溯ると、溪

流沿いに、崩落による洞穴が、いくつも口をあける。洞内に水が注ぎ続けているのが水廉洞である(写真21)。維摩洞は、その名からして、曾ては寺院があったのだろうが、現在は洞穴にはめこむように道観が設けられている(写真22)。祭祀が行われており、動画を撮っていたら「やめなさい」と止められた。

名のない小さな瀑布や水のしたたりが随所に見られ、浸食作用が進行中であることが分かる。

四日目、早朝に停電。ホテルはやがて自家発電を開始したが、村全体が停電となったようで、ガイドが泊まった宿は、遂に復旧しなかったという。

朝食後、村を散策。雁蕩山観光のための村であるが、裏山には墓が並び、歴史を感じさせた。

午前は頭勝門景区。雁蕩山の北側になる。村から東へ進み、謝公嶺という峠を越えて、大荊鎮方面に向かう。このルートは、徐霞客が雁蕩山訪問の時にたどった道である。途中で僧侶が拝礼しているかのような岩山があり、接客僧という。入手した地図上では、大荊鎮に至ったのちに左折して、雁蕩山の東の端を廻って西に向かい、仙溪を溯るとあった。しかし、訪問当時はショートカットの舗装道が途中に設けられており、大荊鎮に至る前に北へ転じ、仙溪に至った。そこから遡及し、古鎮である南閣上街を通り過ぎ、龍西郷という集落で左折、北側から雁蕩山に入る。U字谷を溯り、十分ほど歩くと、向かい合う四角い岩山が見えて来る。頭勝門である(写真23)。ここは近年になって開発されたもので、徐霞客遊記には登場しない。

高さ二〇〇メートルあまりの一对の岩が並び、その間隔はわずか一

〇メートルほどしかない。溪流がその間を流れ、門の手前に道観が立つ。門をくぐり、険しい岩山を登って溪流を溯ると、行き止まりは瀑布となる。瀑布近くに石仏洞という洞穴が口をあけていたが、崩落し危険だというので立入禁止となっていた。

陽光溢れるみどり豊かなU字谷は、両岸に聳える岩山が動的な雰囲気を醸し出しており、山の生命力を感じさせる。「老子」の「谷神不死」の語を想起させるものがあった(写真24)。

途中にあった南閣上街は、明代に礼部尚書まで至った章綸の故郷。状元に及第したことを記念する牌楼が数多く作られている(写真25)。古い街並みと共に「古鎮遊」を誘っているが、地元の人々にすれば生活の中にあるものであり、さほど大切にされている観はなかった。

午後は雁蕩山博物館を観覧。入館料は、中国の他の博物館同様、無料である。大きな雁蕩山のジオラマが作られていたが、あまりに大きすぎて標示の文字が読めない。

観覧後、しばし、雁蕩山の岩山を眺める。岩頭から霞がたなびくのが、まるで岩山から「氣」が立ちのぼっているかのように感じられた。

高速鉄道で上海へ戻り、吉臣酒店に泊。

五日目は、上海博物館で山水画を見学。時間の関係で超特急見学と撮影となったが、次にはじっくり時間を取って見たい。

午後の便で成田へ帰着。

(五)まとめ

今回は、見学にあてた三日間を、ほぼ雁蕩山に限り、同じ宿

に三連泊しての行程であった。能仁寺など見残したところもあるが、瀑布、谷、巨岩とその裂け目など、生成過程の雁蕩山特有の景観を、じっくり観察し、考察することが出来た。

尖った岩山は、実際には雨水などに浸食されて形成されているわけで、「上から下への動き」が作り出したものである。しかし、立ち並ぶ円錐形の岩柱は、むしろ「下から上へ立ちのぼる気」のイメージを喚起させる。

カルスト地形の岩山も、円錐形の細長い形をなす。しかし、それらは溶けやすい石灰岩質なので、きれいな円錐形をなし、岩の形も直線的である。それに対し、硬い火成岩質の雁蕩山では、浸食がスムーズに進むわけではなく、剥離や崩落も伴うため、岩の形がゴツゴツとして不揃いである。そのため、揺らぎながら立ちのぼる「気」の姿を、岩の形に見て取りやすい。こうした「山・岩山」における「上昇する気」を感じ取ることができたことが一番の成果であろう。

また、観音洞のような、岩山に縦に裂ける、開いた洞穴にも、「気の上昇」を見て取ることができる。浅く口をあける朝陽洞も、「気の入入り口」をよく表している。「洞穴と気の流れ」という点でも、様々なことを確認できた。

Ⅲ. 五台山再訪

一. 五台山について

(一) 位置

五台山については、前稿⁽⁶⁾で述べているので、簡略に留める。

山西省忻州地級市五台县にあるが、一部は同市繁峙県にまたがる。山西省の北部に位置する(図1、図4)。

(二) 概要

山域の中央部分に、台懷鎮という集落を含む盆地があり、その周囲を五つの峯が囲む。それぞれ中台・東台・北台・西台・南台の名がある(図5)。

北魏ごろから山内に寺院が建立されるようになり、やがて「華嚴経」に「東北方に菩薩の住処あり。清凉山と名づく。常に中に住す。彼に現に菩薩あり。文殊師利と名づく」とある、インドの東北にあるという「清凉山」こそ、この五台山であるとの認識が広まり、文殊菩薩の靈場とされるようになった。その説は海外までも及び、ついにはインドの修行僧が、五台山を礼拝に訪れるまでに至った。

最も繁栄した時期には、三百以上の寺が林立していたといわれる。観音菩薩の靈場普陀山、普賢菩薩の靈場峨眉山、地藏菩薩の靈場九華山と並び、中国四大仏教名山とされる。

日本の入唐僧や入宋僧の多くも、天台山と共にこの山を訪れた。また、チベット仏教教徒の尊崇も集めており、漢伝仏教とチベット仏教との唯一の共通の聖地となっている。

現在でも、台内に三十九ヶ寺、台外に八ヶ寺ある。五台山頂にそれぞれ寺院があり、山麓の台懷鎮にも寺院が密集する。台懷鎮の顯通寺が最古の寺院で、伝説では漢代の創建というが、おそらくは北魏に始まるのであろう。

徐霞客の訪問は、崇禎六年(一六三三)の八月四日から八日

まで。ごく短期の滞在であった。遊五台山日記。

二．見聞記

(一) 目的

二〇一五年の一二月に、突然、カナダのプリンストン大学の陳金華教授から英文のメールがあった。二〇一七年七月に五台山で、五台山信仰に関わる国際学会(第二回目)を開催するので、発表をしてくれないか、との依頼であった。やがて駒澤大学に勤務する程正教授からも、日本語のメールで同趣旨の依頼があった。稿者に発表できる研究内容があるか心配になったが、程正教授から「五台山に関わる内容であればよい」とアドバイスされ、引き受けることにした。

日程の中に、五台山の中の巡検があったため、それには参加し、五台山の現状について実地調査することとした。学会後の五台山外の巡検は、勤務の関係上、不参加とした⁽⁸⁾。

(二) 旅程(単独行) …二〇一六年七月一日〜二四日日

- 一日目 羽田↓〔飛〕↓北京(北京泊)
- 二日目 北京↓〔車〕↓五台山…学会・開会式(五台山泊)
- 三日目 五台山内巡検…(五台山泊)
- 四日目 学会・研究発表…(五台山泊)
- 五日目 学会・研究発表…(五台山泊)
- 六日目 五台山↓〔車〕↓太原↓〔鉄道〕↓北京(北京泊)
- 七日目 北京↓〔飛〕↓羽田

(三) アクセスルート

五台山へ入る主なルートは、次の三本である。

①河北省石家荘から北上して阜平へ行き、西に転じて太行山脈を越えて台内に入り、台懷鎮に至る。

②山西省北部の大同から南下し、渾源・北岳恒山を経て、北台に至り、台懷鎮に至る。

③山西省太原から北上し、忻州で東に転じて五台县に至り、豆村鎮・仏光寺を経て台懷鎮に至る。

円仁は①で入り、③で出ている。徐霞客は①で入り、②で出ている。稿者は、前回は、往路は、先に北の雁門関を訪ね、南下して代県經由豆村鎮に至り台内に入った。③の変形である。復路は③を取った。今回は、往路は、北京から貸し切りバスで入山したため、①であり、復路は③。

(四) 見聞報告

前日まで

学会の正式名称は、第二屆《五臺信仰》國際學術研討會⁽⁹⁾。学会参加を電子メールで回答すると、それが参加申し込みになる。発表題目と概要をメールで送ると、中国語訳されたものとあわせて、大会のウェブサイト(プリンストン大学のサイト上にある)にアップされる。これが大会案内となる。発表のレジュメを送付すると、全ての発表者のレジュメがまとめて返送されてくる(ワード版かPDF版)。これが発表者資料配付となる。やりとりは全てメール、資料も全て電子化で、当日配布の「開會式次第」だけが、紙媒体であった⁽¹⁰⁾。参加者はPC等を持

参し、電子化された資料を、画面で読むことになる。

参加日程については、「入国予定日、場所」「出国予定日、場所」「参加するメニュー」「宿泊日」などの調査があり、それぞれに対応する措置が取られた。

前日北京において、そこから五台山に行く予定のものは、当日朝に、新世紀日航ホテルのロビーに集合し、貸し切りバスで五台山へ向かうことになった。稿者もこれを選択した。

この間、北京大学の王頌先生が、日本人発表者担当として日本語の電子メールの相手となってくれたが、全ての連絡がメールであり、まったく一面識もなく、直接言葉も交わしたことがない人々と、現地で集合するということとなった。

一日目は移動日。午後の便で羽田を発ち、北京へ。機内で「重源」に関する日本語の本を読んでいる西洋人と隣り合わせになる。その時は声は掛けなかったが、のちに参加者であることが判明。新世紀日航ホテルに泊。

二日目は移動と学会の開会式参加。朝ロビーに行くと、それらしい人が集まっている。近づくと、王頌先生が確認してくれ、無事合流。

午前九時、35人乗りのやや小型のバスで、小雨の中を出発。到着予定が、大会開始の午後三時ぎりぎりということで、昼食は途中のドライブインで、各自で菓子パンを買ってすませる。高速道路なので、起伏はなだらかではあったが、円仁や徐霞客がたどった、昔ながらの①の道をたどり入台。

大会会場の竹林寺は、麓の台懐鎮から中台へ登る途中に位置する。やはりぎりぎりの到着で、すぐにセレモニーが始まる。

政治家や仏教界のお偉いさんが延々とスピーチ、最後に主たる研究者二人の基調講演があった。

終了後バスでホテルへ行き、歓迎レセプション（お寺主催なので、アルコール抜き）。五台山における宿泊施設は、台懐鎮から五台县へ向かうメインルートと、西から来る道とが合流する、三叉路あたりに集中する。三叉路から西に、竹林寺方面に伸びる道は、川沿いで、V字谷の底を走る。そのあたりを大車溝村という。前回宿泊の五峰賓館もこの地だったが、今回の宿舎である錦綉山荘も同じ並びのひとつだった。五台山での宿泊は、すべて錦綉山荘。

三日目は、五台山内の巡検。とても寒い。気温は二〇度ほどだが、冷たい雨が降り体感温度はかなり低い。下着を洗濯したところ結局全く乾かなかった。前回訪問時は八月下旬で、さわやかな天候だったが、今回は、もしものために持参したセーターが大正解だった。

マイクロバス二台に分乗し出発するが、どこに行くのかまったく知らされず。王頌先生に聞いても「竹林寺が担当しているので分からない」と。竹林寺の麓を通り過ぎ、落石のあとをよけながら進み、金閣寺へ（写真25）。

現在五台山内は、景区としては十分に分けられる（図5）。金閣寺は、西南部の清涼寺を中心とする清涼景区にある。ここは前回訪ねたところで、小山の上に位置する。唐代の創建と伝え、皇帝が黄金を塗った瓦を使用したところから「金閣」の名がある。十年前と建物は変わらないが、樹木の生長が著しい。

ここは、唐代に日本人僧侶靈仙が修行をした寺院である。彼

はこのお寺で死去したのだが、「三蔵と称された靈仙を嫉妬した中国人僧侶によつて毒殺された」というのが、日本での定説である。ところが、「毒殺ではない」とする中国人研究者がこれに猛反発し、大論争・大げんかになったという。寺域内には日本人が掘金して建てられた靈仙の石碑があり、前回は中国人ガイドの案内で見学したのだが、今回訪れたところ、看板のガイドマップにも石碑の記載はなく、結局見学しなかった。

一旦三叉路に戻る。雨足が強く、車が高いところへ上れないので行き先変更、となり、鎮海寺へ。ここは台懷鎮に連続するやや南のエリアである懷南景区にある。この寺も、小さな岡の上に建つ。

伝承によれば、この山の麓に、海に通じる「海眼」という穴があり、北海龍王がそこから水を噴き出させて、五台山を水浸しにしたことがあった。そこで文殊菩薩が文殊寺にあった大きな銅鍋で海眼を叩いたところ、浸水は止まった。そこで僧侶たちが銅鍋の上に「鎮海塔」という塔を建て、さらに明代になって鎮海寺が建てられた、という。

現在は、乾隆年間建築の、高さ九趾の美しい塔が聳える(写真27)。「章嘉活佛舍利塔」といい、三代目章嘉の舍利塔である。章嘉は仏弟子のひとりとされ、その第十三世の子孫が、初代章嘉のチベット僧、哲巴鄂色爾。彼は清朝の康熙帝の厚い信望を得、清朝お抱えの僧侶となった。二代目章嘉の阿班羅桑曲殿は雍正帝に招かれ、三代目の業西丹畢蓉梅・若必多吉は乾隆帝に尊崇された。その没後にこの塔が建てられ、肉親舍利が祭られた。

塔は三層構造をなしており、下層は八面体。八つの角に金剛力士が配され、八面は釈迦の生涯を描いたレリーフが並ぶ。中層は上に広がる円錐形。正面に、過去・現在・未来の釈迦三世仏が置かれ、八大菩薩の像がぐるりと取り巻く。上層は幾段からなる円筒形で、上部は黄金で塗られている。

ホテルに戻って昼食。午後はやや小雨となり、午前予定していた南山寺に上る。これも懷南景区にあり、鎮海寺とは清水河を隔てた対岸に位置する。元の至元五年(一二六九)の石碑が残り、元代の創建であろうとされる。もとは大万聖佑国寺と称した。山肌を七層の建築物が重なるように並んでおり、元々は上三層を佑国寺、下三層を極樂寺、中間の一層を善徳堂といい、別々の寺院であった。それを総称して南山寺と称するようになったものである。各層ごとに石彫芸術や壁画など、宝物と呼ぶうるものがたくさんあるが、この寺院ですばらしいのはそこから見える眺望である。

七層を上がるたびに、眺望が開けていくが、最上層からは、まさに絶景である(写真28)。右手には遙かに台懷鎮菩薩頂が見え、その手前に清水河沿いのなだらかなU字谷が伸びる。正面には大車溝などの幾筋もの谷が手前へ伸び、それらをはさむ幾筋もの山脈が、やはり手前に伸びてくるかのように見える。風水説には、大地には「氣」が流れており、その筋目を「地脈」「龍脈」とする考えがある。南山寺に向かって伸びる尾根は、まさに躍動する龍脈を思わせる迫力がある。

山麓に戻り、台懷鎮の方を眺めていると、微かな霧が谷沿いに漂ってきた(写真29)。雁蕩山の陽光に照らされたみどり豊

かな谷とは異なるが、「水」の「気」が漂い、充滿するこの谷も、「谷神不死」の語を想起させた。

最後は普寿寺。台懷鎮寺院群の最北に位置する。金代の創建と伝え、もとはラマ教寺院であった。改革開放後、五台山仏教協会の所有となり、尼衆仏学院という尼僧の学校となった。巨大な建築物が建ち並ぶ。そのひとつには、中国各地の塔のミニチュアレリーフが、高い壁面いっぱい飾られている。「華嚴世界」を表現しているのだという。中学生のグループが体験修行をしていた。法堂では、在籍する八百人を超える尼僧が一堂に会し、法要を営んでいた。

この日の巡検では、結局以上の四寺を訪ねるに止まり、台懷鎮最古の寺院である顯通寺にも、五台山山頂の寺院にも行かなかった。山頂寺院は時間の関係で難しかったのだろうが、顯通寺などは、昨年開かれた第一回大会で既に巡検をすませたので、本年はパスしたということらしい。

四日目は研究発表初日。朝は雨が上がっていたが、やがて土砂降りと強風が繰り返され、肌寒さは変わらず。

発表にあたってペーパーはまったく配られず。事前配付の電子データと、パワーポイントの画像とにより発表する。

発表者は、10ヶ国から35人。7つの小テーマ毎に、4〜6名が連続して一五分ずつ発表。コメントーターが質問や意見を加え、フロアーからもやりとりするという形式であった。中国語と英語の同時通訳がつき、薄井には、日本語を中国語に訳してくれる通訳がついてくれた。

五日目は研究発表二日目。晴れ、おだやかな気候となる。自主

的に昼休みを長めにとり、竹林寺及びその周辺を散策した。

竹林寺は九龍崗景区にある。中台を背負う立地で、前面は深い谷に望む(写真30)。唐代には存在しており、円仁が訪問、滞在している。弘治四年(一四九一)建立の、釈迦牟尼舍利塔が、現存する最古の建造物である。前回訪問時は、大雄宝殿と慈覺大師堂程度しか建物が無く、しかも荒れ果てており、ようやく修復に着手しているという様子だった。それが今回は、美しく巨大な伽藍が立ち並ぶ大寺院となっていた。周囲には、竹林寺にお参りする人のための宿泊施設もあり、門前町を形成している。

夜の送迎レセプション(アルコール抜き)で、忻州師範大学の陳龍教授と、「清涼三伝」の翻訳について話し合った。

五日目は移動日⁽¹⁾。前日の夜、太原までのガイドがホテルに来て、「太原は大雨で道路が冠水しており、道路状況が悪い。早めに出発した方がよい」とのこと、朝の六時出発となる。しかし、結局この日は晴れて、渋滞や交通規制もなく、九時には太原駅に到着。駅で朝食を採る。太原は快晴で、暑いくらいであった。

高速鉄道で、「太原—北京間」は、三時間。黄土高原の太原から太行山脈を下って平野へ出る道をたどったので、車窓からは、侵蝕された溝や段丘のような黄土地貌がよく観察された。北京で再び新世紀日航飯店に泊。五台山が寒く北京が暑いという急激な温度差や、冷たいものの飲み過ぎで、夜中にひどい下痢をしてしまう。

六日目も移動日。朝食も採らず、ふわふわした気分のまま、空

港へ。昼食はチョコレートを少しなめるだけにした。

(五) まとめ

国際学会での発表は二度目で、しかもまったく面識の無い人々との交わりということ、たいそう緊張もし、戸惑いもあった。しかし、結果的には多くの成果を得られ、研究の幅を広げることになった。

五台山についていえば、訪問先は「おまかせ」で、こちらの選択の余地はなかったが、それなりに成果があったと言える。寺院が栄えていることは、これまで他の場所でも見てきたことだが、改めて、既成宗教団体の隆盛ぶりを確認した。また、南山寺からの眺望で、龍脈を感じ取ることができたのも大きかった。五台山から太原へ行く車窓から山々を眺めると、「下から上への気の流れ」や、「横に流れる地脈」などが見えてきた。前回も同じ山を見ているはずだが、その時は「気」や「脈」についてはまったく感じていなかった。こうしたことから、「思うって見る」のでなければ、見えないものである。

注

(1) 前稿「その一」(本誌十一号、二〇〇七年)では天台山・廬山訪問を、「その二」(同十二号、二〇〇九年)では五台山・王屋山訪問を、「その三」(同十三号、二〇一〇年)では南岳衡山・茅山訪問を、「その四」(同十五号、二〇一二年)では中岳嵩山・金華山訪問を、「その五」(同十六号、二〇一三年)では武夷山・龍虎山・余山・武功山・江陰馬鎮訪問を、「その六」(同

第十七・十八合併号)では武当山・桂林・九嶷山訪問と江陰馬鎮再訪を、それぞれ報告した。

(2) 近年は中越間の政治的関係の問題もあり、不穏な雰囲気になることもある。実は、二〇一四年に、広西南部訪問を予定していたのだが、政治情勢悪化のために断念し、九嶷山に変更した経緯があった。今回は、何ひとつ問題はなかった。

(3) こうした遺跡の破壊は、公園化され整備されていない場合はどこでも起こる。かつて訪ねた桂林東方の興安の乳洞岩も、いたずら書きなど文化財破壊が行われていた。

(4) 「夢溪筆談」巻二四・雑志。沈括はまた、別の場所(太行山脈)で、山の中で貝殻の化石を見て、かつてはここは海であったのだろうという見解も示している。

(5) この年(二〇一五)、大学で「書論及び鑑賞」の授業を担当することになった(前期は大橋修一先生で、後期が小生)。そこで中国絵画を取り上げようと考え、準備を進めていたが、山水画と気との関わりが重要であることが分かった。そこで絵画論・山水画論との関わりからも、岩山である雁蕩山に注目することとなった。

(6) 前掲注1。

(7) まったく面識の無い方からの依頼であり、仏教学の研究も五台山に関する研究も発表しているわけでもない稿者が、何故に発表者に選ばれたのかは、未だに分からない。あるいは稿者の著書(博士論文)である『天台山記の研究』が目にとまり、山嶽と仏教(宗教)との関わりについて何か話せるだろう、とされたのかもしれない。また、後の情報によれば、仏教に関わ

る国際学会を開催する場合、中国と欧米の他に、韓国と日本の発表者は欠かせないとされているらしい。幾人か打診して断られ、稿者にお鉢がまわってきたということではないか。

(8) この後半の巡検については、五台山の北部を廻るらしいこと、二日目は大同の雲崗石窟を見学し、大同で解散することくらいしか知らされておらず、どこをどう見学するのか、どのルートを取るのかも不明であった。実は五台山を出入りする②のルートをとどるものであり、徐霞客がたどった道でもあった。この点では、巡検をパスしたことが悔やまれる。

(9) 学会の内容については、別稿を予定しているので、本稿では概略に留める。主に探索した五台山について述べる。

(10) 当日お偉いさんのあいさつが多くあったが、出席者の確定などで、この資料のみ当日紙媒体配布となったのだろう。

(11) 五台山から北京への復路は、ア「北京まで車」、イ「太原まで車、そこから航空機」、ウ「太原まで車、そこから鉄道」の選択肢があつた。当初はアを希望していたが、往路でこのルートを取ることが分かったので、最も安価なウとした。

● 広西南部・雁蕩山・五台山関連和文資料

・都嶠山と勾漏洞については、奈良行博『道教聖地 中国大陸踏査記録』(平河出版社、一九九八)に、一九九〇年九月の調査記録が収録されている。それによれば、都嶠山はほとんど打ち捨てられた状態で、老齢の女性道士二人と民間の守り人がいるだけ。現在の整備ぶり、施設の充実ぶりが信じられないほどである。これ以外に、広西南部の名勝を記す資料はない。

・雁蕩山についても、和文の資料はない。

・五台山については、たくさんの研究書や写真集、訪問記などがある。戦前のものとして、小野勝年・日比野丈夫『五臺山』(座右寶刊行会、一九四二。平凡社東洋文庫、一九九五)があり、竹林寺については、斎藤忠『中国五台山竹林寺の研究』(第一書房、一九九八)がある。

● 図版

- 図1 全体位置図…グーグルアースより
- 図2 広西南部位置図…グーグルアースより
- 図3 雁蕩山内位置図…グーグルアースより
- 図4 五台山風景名勝区位置及交通…『五台山志』(山西人民出版社、二〇〇三)より
- 図5 五台山景区分布…同前



写真1 都嶠山遠景



写真2 V字谷



写真3 慶寿岩禅寺



写真4 勾漏洞周边



写真5 勾漏洞内



写真6 水月岩周边



写真7 水月岩の祠



写真8 水月岩洞口



写真9 水月岩内部



写真10
左江石林



写真11
揚美古鎮孔子廟



写真12
広西南部の路面



写真13 雁蕩山大龍湫景区



写真14 大龍湫、内から



写真15 靈峯觀音洞



写真16 観音洞観音閣



写真17 朝陽洞

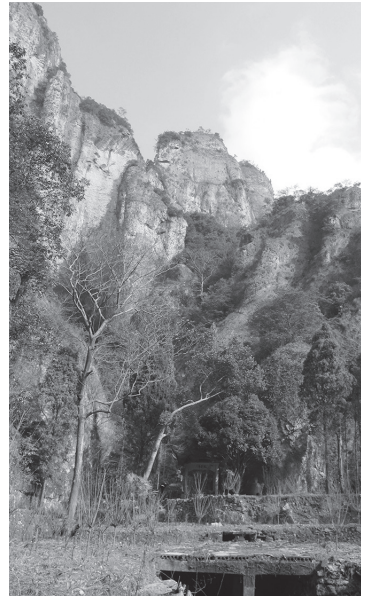


写真18 双珠谷の上昇するとき岩山



写真19 靈岩寺と展旗峯

写真20 小龍湫



写真21 水廉洞、洞内から

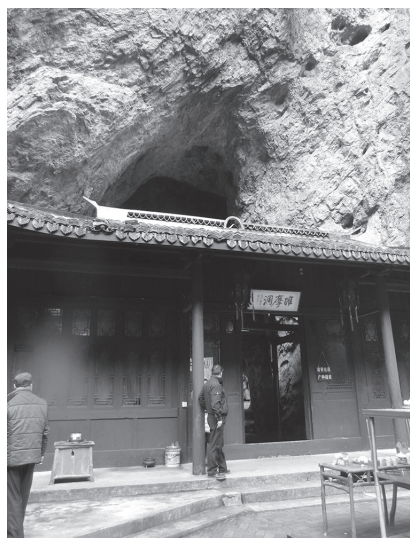


写真22
維摩洞



写真23
顯勝門



写真24
U字谷



写真25

南閣街牌樓



写真26

五台山金閣寺

写真27

鎮海寺舍利塔

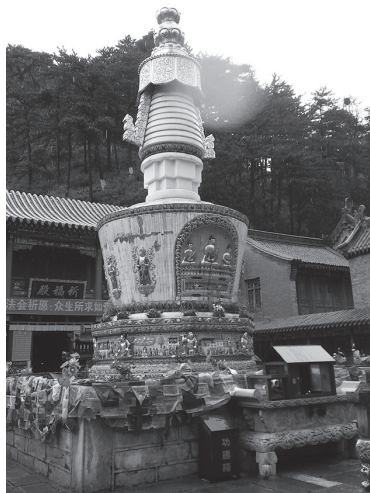




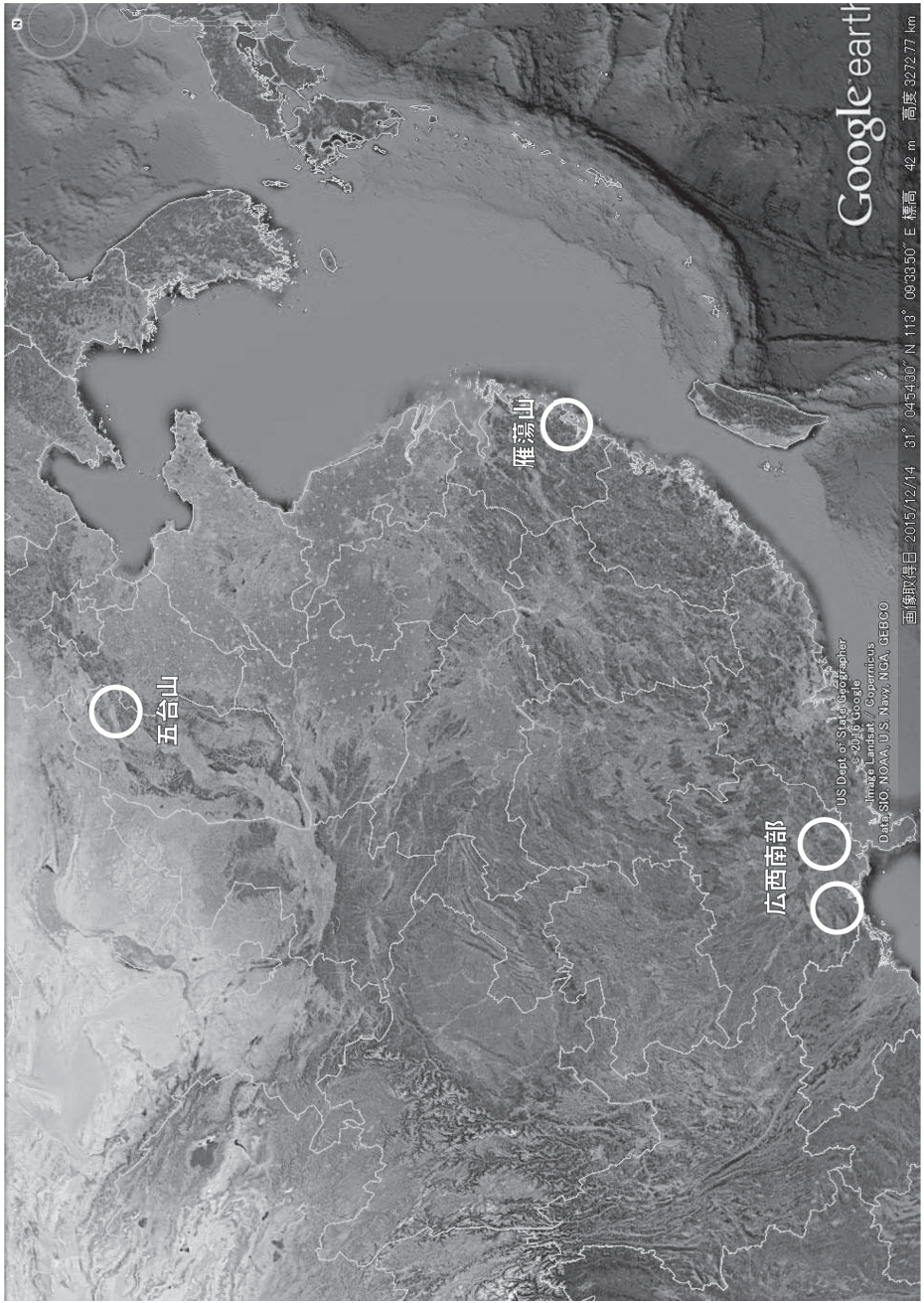
写真28 南山寺からの展望



写真29 U字谷にただよう気



写真30 竹林寺



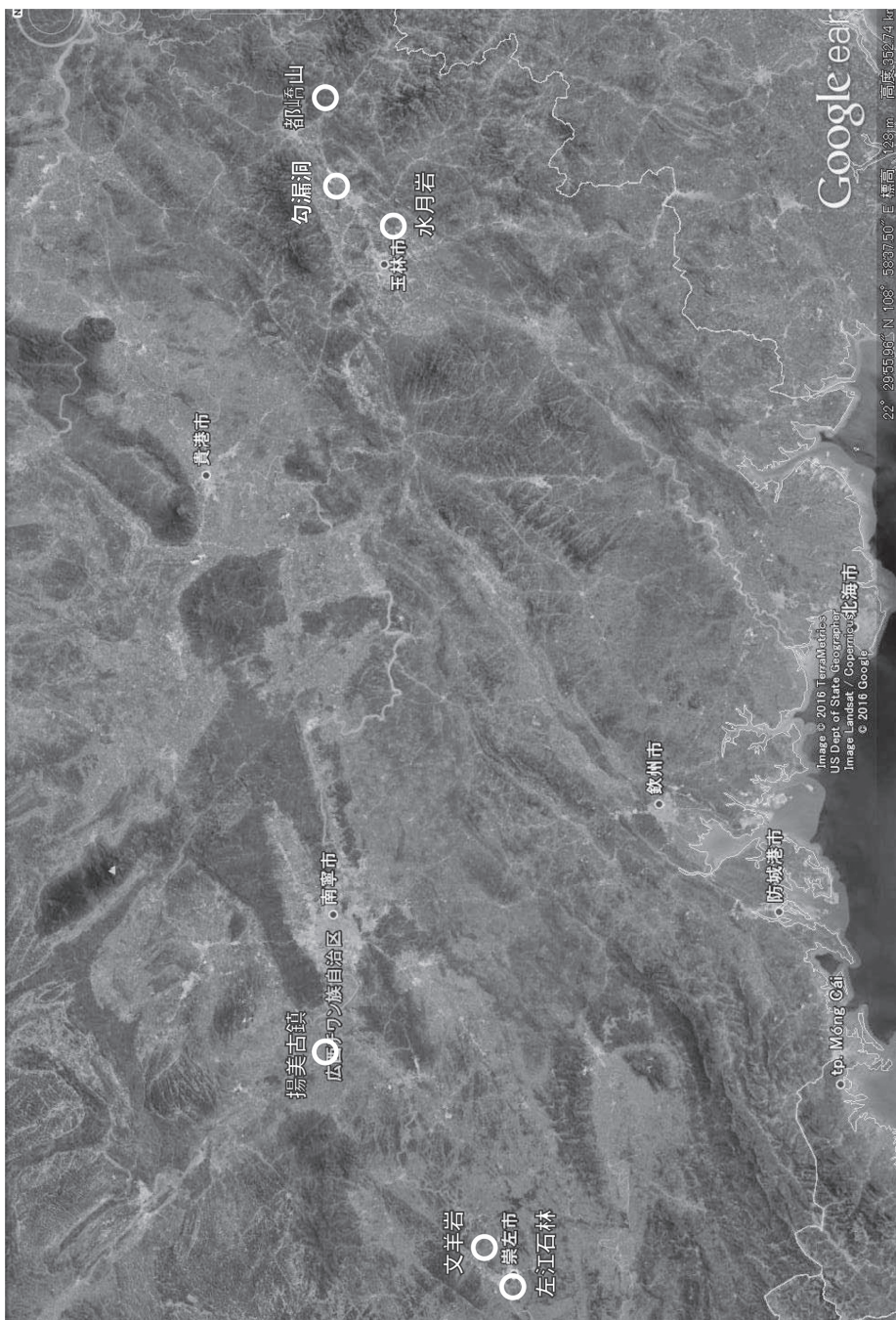


图 2

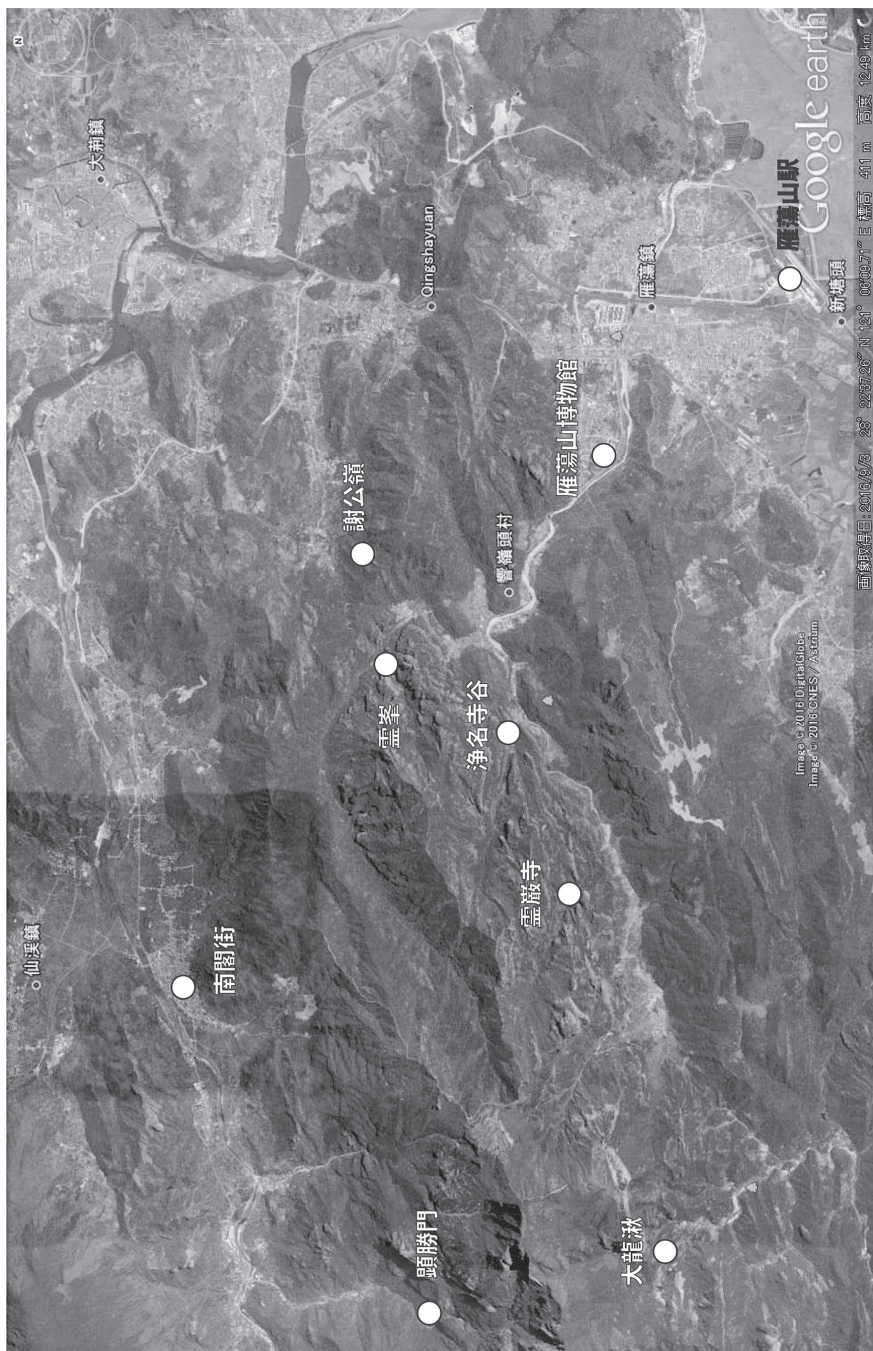


图 3

五台山风景名胜区位置及交通

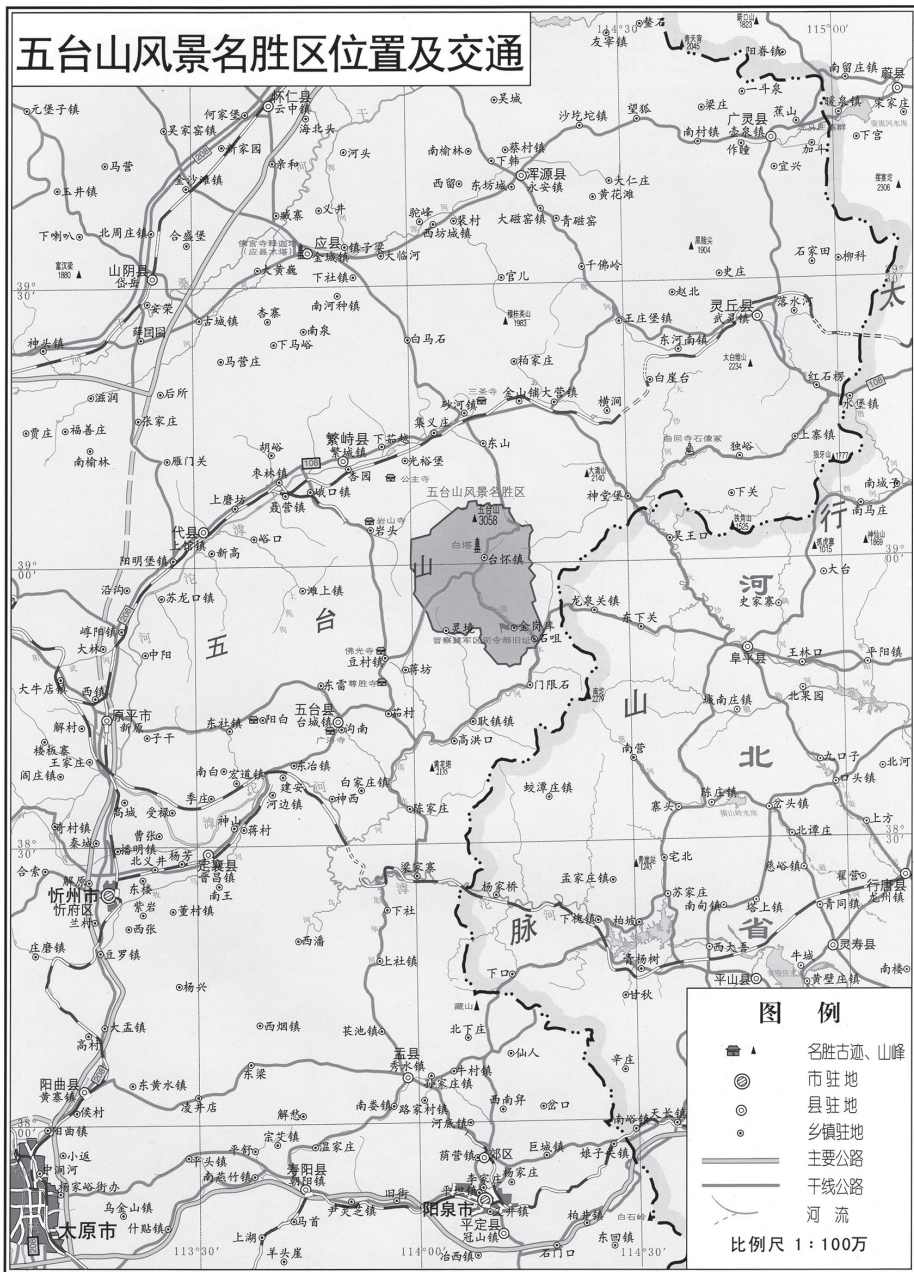


图 4

五台山景区分布

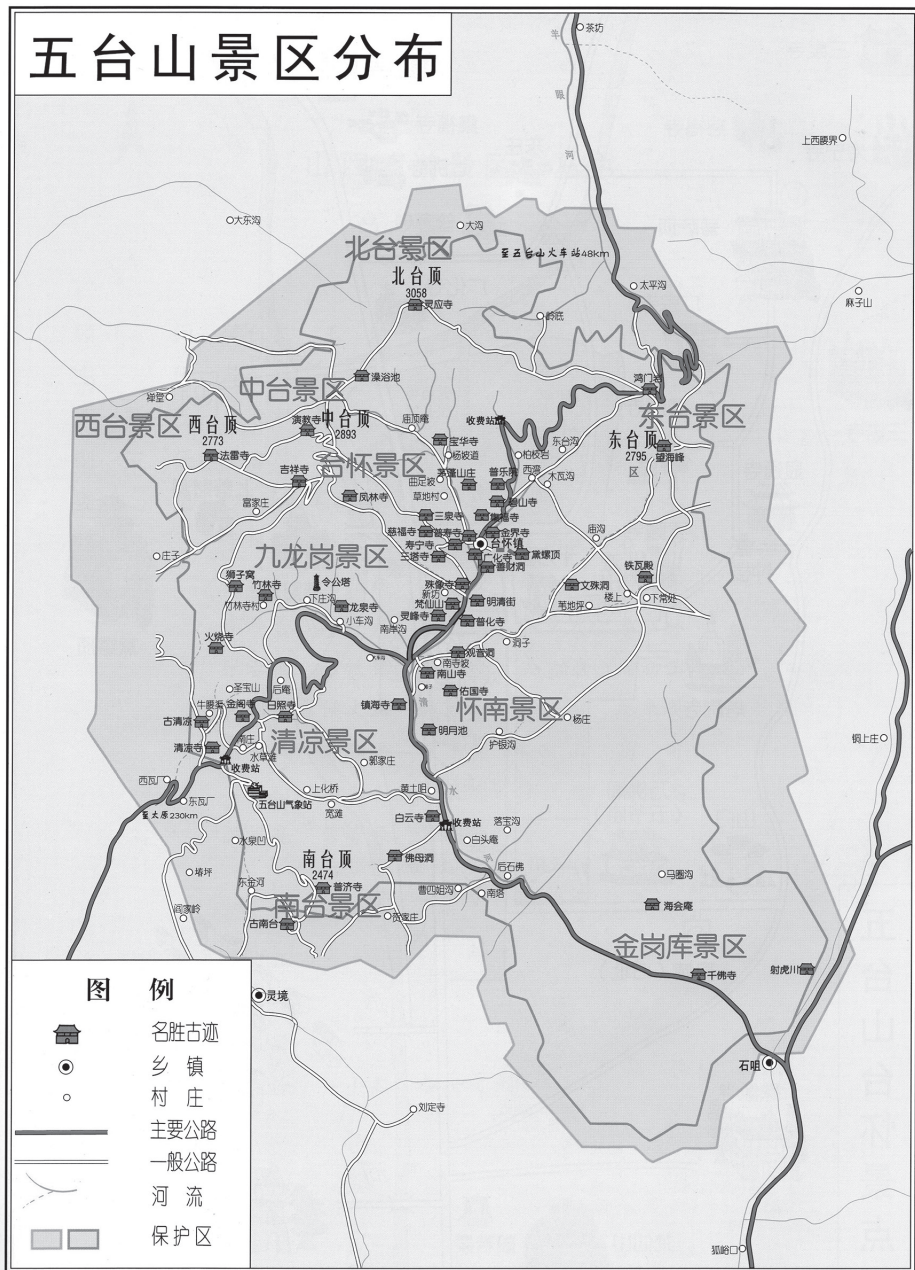


图 5